

「のび太の漢字テスト」経験者が思う



「国際人」とは

矢野 文香（ピュイ・ド・ドーム補習授業校）

AG+プロジェクトを通じて、私は多くの補習授業校の先生方と出会い、たくさんの刺激を受けました。研修や情報交換の機会をつくり、さまざまな実践や知見を共有してくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

自称「3カ国語を不自由に使いこなす」私ですが、今回の節目にあたり、これまでの経験を振り返りながら、プロジェクトから学んだことや、海外で育つ子どもたちの教育について考えてきたことを書いてみたいと思います。

2008年、仕事のためにフランスへ渡りました。その後、運命のいたずらか、愛する「優しくて、チーズ無しでは生きられないフランス人」と結婚し、二人の子どもを育てることになりました。

2020年からは、家庭の都合で約2年間、日本で暮らす機会にも恵まれました。子どもたちにとって、日本は新たな生活の場でし

た。渡日した頃には日本語が十分に話せなかった子どもたちも、2年後にフランスへ戻る頃には、日本語にすっかり慣れ親しんでいました。一方、帰仏後には、今度はフランス語を取り戻していく必要がありました。帰仏直前にフランス語で「アラジン」を見せたところ、子どもたちから「何言っているか全然わかんない」と言われたときの衝撃は、今でも忘れられません。海外で暮らす子どもたちにとって、言葉は一度身につければ終わりというものではなく、生活する環境によって変化していくものなのだと、親として改めて痛感しました。

かくいう私自身も子どもたちと似た経験をしています。小学1年生の秋から4年生の秋まで、サウジアラビアとパキスタンで暮らしました。日本で生まれ育った自分が海外へ渡るといふ、子どもたちとはまた異なる立場でしたが、言葉や勉強はもちろんのこと、自分のアイデンティティーについて戸惑った記憶があります。子どもの頃の経験は、今、海外で育つ子どもたちの姿を考えるうえで、一つの土台になっています。

帰仏直後、補習授業校で教えてみないかと声をかけていただきました。ちょうど、自分が海外で過ごしていた頃と同じくらいの年齢の子どもたちを教えることになったのです。

教師としては右も左もわからない状態でしたが、初任者研修会や授業研究は、授業を組み立てるうえで大きな助けとなりました。

AG+の初任者研修会で学んだことの一つに、「構造読み」があります。私はもともと物語文の授業に苦手意識があり、物語をどのように読み解き、子どもたちと一緒に考えていけばよいのか、悩むことがありました。正直なところ、物語は頭で考えるというより「感じるもの」だと思っていたのです。しかし、構造読みは、物語の展開や登場人物の関係などを整理しながら読み進めるうえで、とても参考になり、実際の授業でも取り入れるよう努めました。

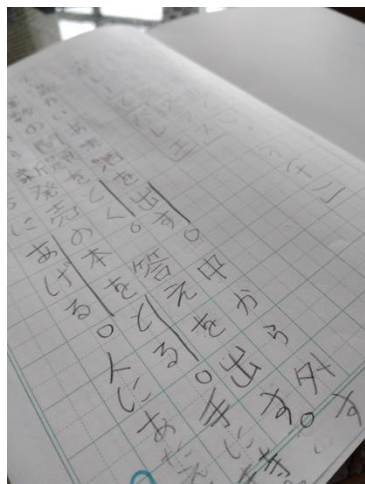


また、授業研究で紹介された「ごんぎつね」の実践も印象に残っています。ごんや兵十になったつもりで日記を書くことで、登場人物の心理的な変化を追うという活動です。「ごんぎつね」は、物語そのものが切なく、私にとっては少し苦手意識のある作品でした。しかし、登場人物の立場になって日記を書く活動を通して、子どもたちも気持ちの変化を捉えやすくなったと感じました。一方で、実際に授業を行ってみると、このような活動にもう少し時間をかけ、物語の展開に沿って登場人物の心情を丁寧に追

いかけていけば、さらに学びを深められたのではないかという反省も残りました。

研修で紹介された実践を授業に取り入れ、子どもたちの反応を見ながら手ごたえや改善点を振り返る。そうした試行錯誤を通じて、私の中で授業に対する考え方が整理されていきました。日本語や国語の知識を教えるだけではなく、子どもたち自身が考え、気づき、主体的に取り組める授業を目指したい。AG+で出会った先生方の実践は、その方向を考えるための大きなヒントになりました。

補習授業校の授業で、特に難しさを感じるものの一つが漢字の指導です。情報交換会や初任者研修でも話題となり、多くの先生方が苦勞しながらも、さまざまな工夫を重ねておられます。そうした実践に感心する一方、自分の授業に十分に生かしているか、子どもたちにうまく伝えられているかと、もどかしさを感じることもありました。



私自身、海外から日本に戻った後の漢字テストで、ドラえもんの「のび太くん」のような点数を取ることもあるのだと、妙に感心した記憶があります…その後努力して学び直しましたが、大人になってみると、テクノロジーのおかげで「すべての漢字を手で書けなくても何とかな

る」場面が増えました。

もちろん、漢字を読めること、書けることは大切です。それでも、漢字を正確に覚えることだけでなく、「文章全体から意味を

推測する力」や「漢字の成り立ちから意味を考える力」も育てていきたい。漢字を覚えることそのものを目的とするのではなく、漢字を手がかりに言葉や文章を理解する面白さを伝えられたらと思います。

現在、私は講師ではなく、保護者として補習授業校に関わっています。立場が変わった今、改めて考えるのは、子どもたちが日本語を学ぶ意味についてです。

私たちの補習授業校は小規模で、児童の多くは日仏家庭、あるいはフランスに永住する家庭の子どもたちです。家庭内で日本語を

話す機会が多い子どももいれば、日常生活のほとんどをフランス語で過ごし、補習授業校の授業と宿題の時間だけ日本語に触れる子どももいます。同じ教室にいても、日本語との距離は一人ひとり違います。

小さいうちは、親の期待に応えるため、あるいは自分でもよくわからないまま通っている子どももいるでしょう。しかし、成長するにつれて、自分はフランスで暮らしているのだから、日本語はそれほど必要ない、そこまで勉強しなくてもよいのではないかと考えるようになることもあります。そして実は親の側にも、日

本語教育を続けることに諦めに似た思いを抱く瞬間があるのではないのでしょうか。

そんな子どもたちに日本語を学び続けてもらうため、補習授業校では日本の学校行事や国語以外の教科など、子どもたちが興味を持ちやすいものを通して、



て、日本語や日本文化に親しむ機会をつくっています。「日本語を学び使えることが楽しい」「日本について知ることが面白い」という気持ちが、学びを続ける力になるからです。

ただ、私自身は、子どもたちに「日本人として育ってほしい」という願いだけではなく、特定の国や文化にとらわれない、国際的な視野を持って育ってほしいと思っています。

言語は、あくまでも、自分の考えを伝え、他者とつながるためのツールです。しかし、複数の言語を使うことは、単に多くの言葉を知っているということ以上に、複数の考え方やものの見方に触れ、それらを自分の中に育てていくことにもつながると信じています。

フランス語で考える回路をすでに持っている子どもたちが、日本語を学ぶことで、日本語で考える「**もう一つの回路**」を育てていく。日本語の語彙や表現を知り、日本の物語や文章に触れるなかで、フランス語とは異なる言葉の感覚や物事の捉え方に会うこともあるでしょう。国語を学ぶ過程で、日本語ならではの感性や表現の豊かさを感じ取ることもできるでしょう。

それは単に「日本人らしさ」を身につけることが目的なのではありません。今ある自分の世界に「**もう一つの視点**」を加えていくことです。複数の言語を持つことは、多方面から世界を眺め、自

分の思考をより豊かにしていく可能性を持っているのだと思います。



AG+の活動を通じて、多くの先生方の実践や考えに触れることができました。自分の授業にすべてを取り入れられたわけではありませんし、今振り返れ

ば、もっと工夫できたこともあったと思います。それでも、異なる環境で子どもたちを育て、教えている先生方の経験を知るとは、自分の目の前にいる子どもたちを理解するための新たな視点を与えてくれました。

補習授業校は、日本語や日本文化を学ぶ場であると同時に、子どもたちが言葉を通じて新しい考え方や感性に出会う場所でもあってほしいと思います。子どもたちが大きくなったとき、補習授業校で過ごした時間が、単に日本語を勉強した時間としてだけではなく、一人の「**国際人**」として自分とは異なる考え方や感性に触れ、自らの世界を広げた時間として残ってほしいと心より思います。